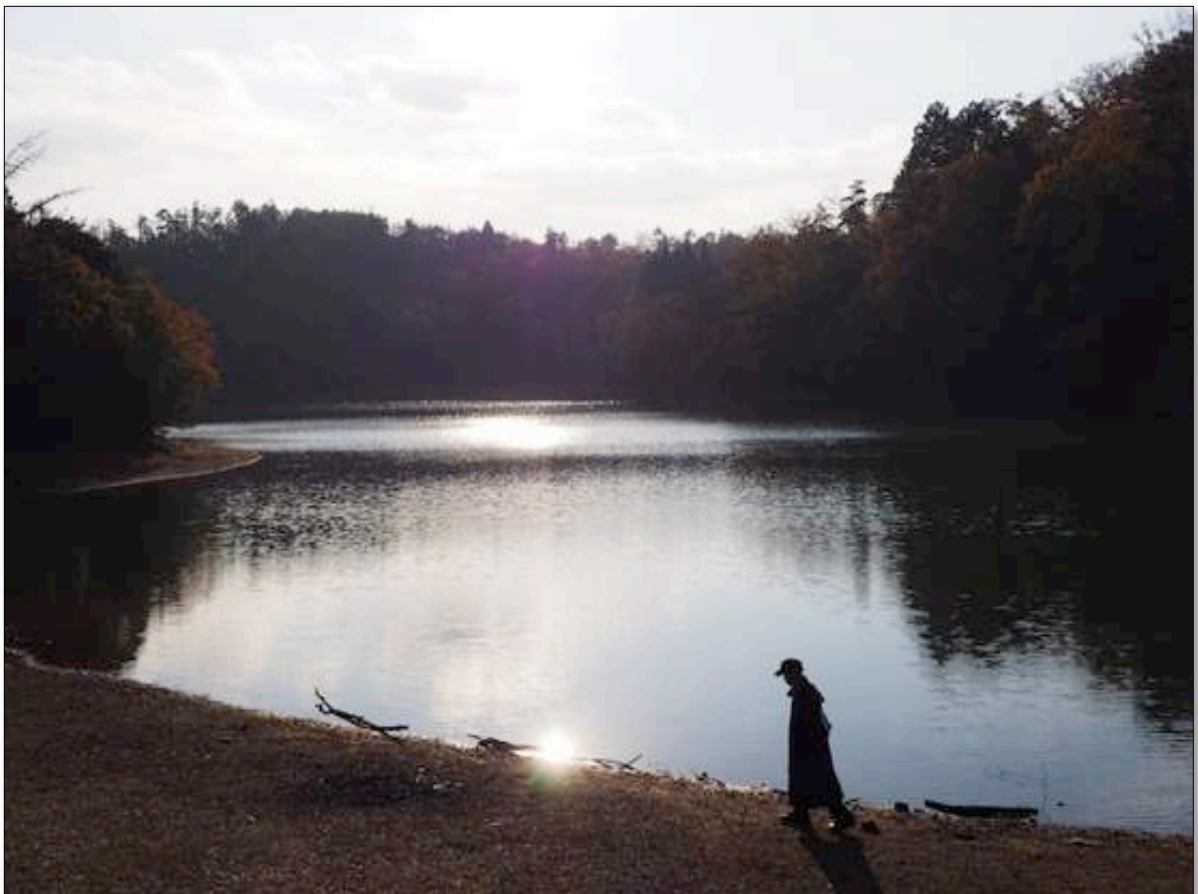


『幻をみるひと。』

詩人・吉増剛造と京都』

ドキュメンタリー映画
2017年



京都の秋、池のほとりを歩く吉増剛造。

【この映画について】

海は生命の母でもあり、その水は生命を生かしている。その水が人間を襲うこともある。東日本大震災後、水が持っている両義性に驚愕した詩人は新たな意味を求めて豊富な地下水のある京都を訪れることにした。それは生命の意味を問い直すことでもあった。

世界遺産でもある古都・京都は、1200年の歴史を持つ。

深い山で囲まれた盆地である京都は、その地形から豊かな地下水をたたえている。（その量は日本一広い琵琶湖の水量とほぼ同じである。）吉増は京都で「水」との対話をはじめめる。そして、四季の京都を通じ、一編の詩が生み出されていく…。

吉増は、ノーベル賞作家・川端康成が『古都』を書いた「流響院」をベースとし、醍醐寺、妙心寺、大徳寺、貴船神社に、京都の「水」を辿り、龍の幻影を追う、「水の旅」をする。そこで、吉増は水の言葉“A Tongue of Water”に触れる。彼は、目に写るものすべてに子供のように反応し、森羅万象と会話し感謝する。カメラは、80歳を目前にした詩人の、感性の驚くべき処女性を映し出す。吉増の姿に、川端や芭蕉の姿が重なっていく…。

これは、今まで誰も見たことのなかった、吉増の貴重な創作風景を映し出すドキュメンタリーだ。



「詩乃傍らで」 通称「怪物君」



京都「流響院」にて。秋の紅葉を背に
日本庭園を見つめる吉増剛造



【詩人・吉増剛造】

日本最大の詩人、吉増剛造、78歳。20代から約60年にわたり、現代詩の最前線を担い、今もなお旺盛に創作活動が続けている。詩＝文字という常識を覆し、写真・映像・ペインティング・パフォーマンス・旅など、あらゆる形で詩を表現してきた。吉増の人生を一言で表すなら「詩、アバンギャルド」だろう。芸術院会員、文化功労者となっても、その創作意欲は衰えることを知らない。



【震災～京都～水の旅】

地震・津波・放射能・戦争の臭いのする政治…まるでドラゴンの背に乗っているかのような今の日本…。2011年の巨大地震で、大津波の爪痕を見た吉増は、すべてを剥ぎ取っていく「水」の衝撃に言葉を失った。

吉増は震災後、それまで付けていた「日記」から、文字・罫線・ノートという形・サイズ…といった自分の「心の枠」を取り払う。そして原稿用紙や和紙を自ら貼り合わせた大きな紙に、ペンや筆、文字や色で、心のままに書き、その日に届いた手紙をコラージュし、さらに色を重ね、新たな日記のスタイルを生み出した。それは彼の新しい「詩」だった。

色鮮やかな抽象画のようなそれら「詩」たちは、吉増によって「怪物君」と名付けられた。

（「怪物君」は、2016年、東京国立近代美術館での、初めての詩人の個展「全身詩人 吉増剛造展『声ノマ』 The Voice Between: The Art and Poetry of Yoshimasu Gozo」で展示された。）



京都の秋。池のほとりにたたずむ吉増剛造

【映画の舞台となる流響院とは】



京都東山にある「流響院」。

近代日本庭園の先駆者とされる作庭家・小川治兵衛による池泉回遊式庭園の傑作。

「流響院」の協力のもと、ここをベースに詩人・吉増の京都の水を巡る旅は四季を通じて行われた。



この「流響院」で、吉増は川端康成の幻影に出会う。
ノーベル賞を決定づけた名著「古都」が書かれた場所であった。



【吉増の創作現場】

吉増は、ただ「書く」だけではない。灯りをともし、香を焚きしめ、カセットテープを回し、彼の「チャント」を聞きながら…。時に目隠しをし、時に石の音を聞き、紙にインクを垂らしていく…。



流響院にて。「怪物君」を創作する吉増剛造

日本を代表する歌人・与謝野晶子（1878～1942）の肉声を流し

目隠しをして、口にサヌカイトをくわえ、絵の具やインクをたらしている

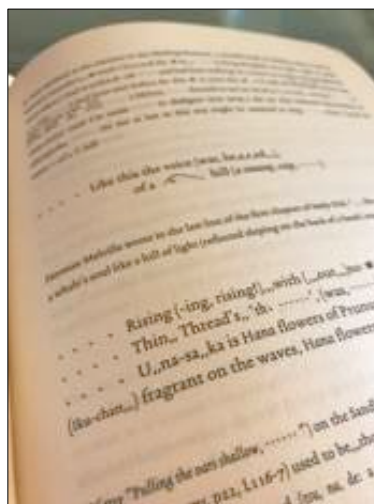


#630



#609

出演
吉増 剛造 Gozo YOSHIMASU



「Alice Iris Red Horse」 Selected Poems by Yoshimasu Gozo
Published September 27th 2016 by New Directions

詩人。1939年東京都生まれ。文化功労者、日本芸術院会員。2016年、New Directionsより「Alice Iris Red Horse」が発行される。慶応義塾大学文学部国文科卒業。1964年詩集『出発』を出版。以降、精力的に詩作を続ける。主な詩集に『黄金詩篇』（高見順賞）、『熱風 a thousand steps』（藤村記念歷程賞）、『オシリス、石の神』（資生堂の現代詩花椿賞）、『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』（芸術選奨文部大臣賞）、『表紙omote—gami』（毎日芸術賞）など。朗読パフォーマンスも得意とし、海外でも積極的にpoetry readingを開催、「KAMIKAZE GOZO」と賞賛される。詩のみならず、写真や、「gozo Cine」と題した映像など、ジャンルを超越した活動を展開。城西国際大学客員教授も務める。2016年、東京国立近代美術館始まって以来の、初の詩人の個展「全身詩人 吉増剛造展『声ノマ』 The Voice Between : The Art and Poetry of Yoshimasu Gozo」が開催され話題を呼んだ。

監督・プロデューサー
井上 春生 Haruo INOUE



映画監督。1963年、奈良県出身。シンガポール日本人学校、同志社大学法学部卒。東映京都撮影所で深作欣二監督、降旗康男監督らに師事。

主な映画に、「KABUL TRIANGLE」（2006年、日本アフガニスタン合作）、「バードコール」（2006年）、「チェリーパイ」（2006年）、「音符と昆布」（2008年、第2回ソウル忠武路国際映画祭正式招待）、「THE ROOTS」（2008年、日本アフガニスタン合作）、「遠くの空」（2010年）「案山子とラケット」（2015年）など。合作映画はアフガニスタンやインドの国際映画祭の正式招待を受ける。アフガンフィルムと協働して日本でアフガニスタン映画祭を4度開催。武蔵野美術大学特別講師、天理大学「Creative映画塾」講師。化粧品ブランド「資生堂」のCMも手がけ、2001年にJAA広告コンクール銅賞、2006年にACC46th CM FESTIVAL キャンペーン特別賞。

【映画データ】

「幻を見るひと。詩人・吉増剛造と京都」

エグゼクティブ・プロデューサー 城戸朱理

プロデューサー・監督・編集 井上春生

朗読 大鷹明良・小林あや

撮影 安田浩一・大木スミオ (J.S.C.)

照明 渡辺大介

ビデオエンジニア 岩崎伸哉・森田順

録音 中村太郎

翻訳監修 遠藤朋之

翻訳 甲斐菜穂美 Craig Dale Michael Fessler

アシスタントプロデューサー 小野田桂子

制作 山本礼二・保中良介・赤塚敏史

デスク 白崎裕美子

撮影助手 宇野寛之・山村卓也・中安健太

法務 森直樹

企画撮影協力 醍醐寺・妙心寺・大徳寺・貴船神社・真澄寺別院「流響院」

協力 東京国立近代美術館・大野一雄舞踏研究所・大友良英・鈴木余位（読み：よい）

撮影機器 REDONE・SonyNEX-FS700R

スタジオ PROCENSTUDIO・NiTRo SHIBUYA

制作 HUGMACHINE

製作 Shinnyo

2017年 日本映画

エグゼクティブ・プロデューサー

城戸 朱理 Shuri KIDO

詩人。1959年、岩手県盛岡市生まれ。明治大学在学中、20歳で、歴史ある詩と批評の雑誌「ユリイカ」新鋭詩人に選ばれる。1985年、第一詩集『召喚』を刊行。積極的に批評も発表し、現代詩の新世代を代表する存在となり、「戦後詩(日本のポストモダン・ポエトリー)を滅ぼした若き巨大な詩人」と呼ばれる。アートドキュメンタリーの企画・監修を約20年務める。2004年、ロッテルダム国際映画祭招待作品「母モニカ」、エグゼクティブ・プロデューサー。